

運動療法が奏効した 2型糖尿病患者の症例報告

古川 康彦

Yasuhiko Furukawa

順天堂大学医学部附属静岡病院 糖尿病・内分泌内科/

順天堂大学大学院医学研究科代謝内分泌内科学

コンサルテーション

【他科の専門医もしくはかかりつけ医からの紹介目的（紹介状の内容）】

紹介元のかかりつけ医にて、約12年前より高血圧症でフォローされていた48歳男性。41歳時より2型糖尿病および脂質異常症も併発（健康診断で指摘）し、食事療法・内服加療を行っていたが血糖コントロール悪化および体重増加が続いたために専門家による加療が必要と判断され当科に紹介となった。

当科紹介時はグリメピリド 1.5 mg, シタグリブチン 50 mg, メトホルミン 750 mg, ピオグリタゾン 30 mg/日内服にてHbA1c 8.8%とコントロール不良であった。学生時代は硬式テニス部に所属し、かなり運動習慣があったが、就職（銀行）後より多忙のため運動習慣もなくなり体重も増加の一途をたどっていた（172 cm, 20歳時：62.7 kg (BMI 21.2 kg/m²) → 当科紹介時：82.2 kg (BMI：27.8 kg/m²)。

患者背景

【患者】48歳男性（銀行員）

【主訴】現在より血糖コントロール改善および減量希望

【既往歴】高血圧症（36歳）、脂質異常症（41歳）、2型糖尿病（41歳）

【家族歴】父 2型糖尿病、心筋梗塞

母 高血圧症

兄 境界型糖尿病

これまでに行った治療の経過・内容

【糖尿病の発見から現在までの経過】

毎年職場で健康診断を受けており、36歳時に高血圧症を、41歳時に糖尿病および脂質異常症を指摘される。38歳時より高血圧症に対しアムロジピン 5 mg/日の内服を継続中、42歳時より脂質異常症に対しピタバスタチン 1 mg/日の内服を継続中であった。2型糖尿病に対しては食事・運動療法にて経過観察されていたが、43歳時よりメトホルミン 750 mg/日に加えて、45歳時よりピオグ